

# 片山公一 福山を愛した洋画家

特別展示：松本コレクションの茶道具  
マルク・シャガール《青い花瓶》初公開

2018年4月4日(水) – 6月17日(日) 会場：常設展示室

観覧料：一般300円(240円) 高校生以下無料( )内は20名以上の団体料金  
※ただし、4月4日(水)～4月15日(日)は、マルク・シャガール《青い花瓶》初公開を記念して無料  
※月曜休館 ただし、4月30日(月)、5月1日(火)は開館  
※学芸員によるギャラリートーク 4月6日(金)、5月18日(金)、6月9日(土) 午後2時より

福山市出身の洋画家、片山公一(1910-1969)<sup>(1)</sup>がこの地を去って49年経つ。片山は、独立美術協会展(以下、独立展)を中心に、静物画や人物、風景を鮮やかな色彩と大胆な筆遣いで表現した、昭和のコロリストであった。

独立展では、中山巍や小林和作、田中佐一郎らに師事して、1948(昭和23)年に独立賞を受賞し、1951(昭和26)年、同会の会員に推されるなど将来を嘱望された。郷里・福山においては、師範学校時代の恩師や画家仲間、財界人など支援者たちの期待を一身に集めた画家であった。

1950(昭和25)年頃からは、ほぼ毎年のように東京から帰郷し、数ヵ月間を福山で過ごして作品を制作し、個展を開催した。片山の芸術への熱意に心を動かされた福山の支援者たちは、渡欧させるために後援会を結成して、1960(昭和35)年、1966(昭和41)年と2度の渡欧を援助した。片山も支援者たちに近況の手紙や絵葉書を送り、帰国ごとに100点を超える滞欧作品展を福山で開催して、期待に応えた。その最中、片山の58歳での急逝は、多くの関係者の深い悲しみを誘った。

本展では、福山の人々に愛された画家、片山公一の1935(昭和10)年、第5回独立展の出品作《くだものなぞ》(No.1)から最晩年の第36回独立展出品作《南仏の港》にいたるまでの画業の足跡<sup>(2)</sup>をたどるとともに、福山との深い繋がりを示していきたい。



1.《くだものなぞ》1935年



2.《ニコライ堂》1949年頃

## I 画家への道(1910-1930)

片山公一は、1910(明治43)年、広島県福山市野上町に父・健治、母・ユキの4人兄妹の長男として生まれた。片山家は、備後特産の絣を織って京阪神、全国各地へ販売していた老舗の木綿問屋であった。片山の生まれた翌年、店の経営が傾き、一家は、店を手放して満州奉天(当時)に移住して薬局店を開いた。しかし、見知らぬ土地に馴染めず、経営もうまくいかず、1918(大正7)年に福山に戻り、本町で酒屋を営むこととなった。

幼少期の片山は、異国の地で過ごし、日本語も覚束なかったというが、帰国後はすぐに上達した。そして、福山の小学校では、下級生からも恐れられる<sup>(3)</sup>ほどの腕白に成長した。

盈進商業学校に進学するも、その翌年の1924(大正13)年、母の病氣、妹たちの世話、家業の手伝いで無理をして肋膜炎を冒された。彼は、やむなく休学して母と共に転地療養の生活を送ることとなる。この時期、雑誌の挿絵に興味を覚え、近くの山々の景色を描くようになった。片山が中学3年、13歳の頃である。

1926(大正15)年には、父が43歳の若さで逝去した。これを機に、それまで大目に見られていた絵の制作も、祖母・シゲや母から猛反対されることとなった。2人の意に沿うように進路を変更し、商業学校を中途退学して広島県立福山師範学校に入学した。しかし、片山は、このような状況下でも福山の洋画家グループ「ぶらんだるじゃん<sup>(4)</sup>」に油彩画を出品するなど、画笔を折ることなく制作を続けた。

師範学校時代は、萩原朔太郎らの近代詩に興味を持つ他、美術雑誌『アトリエ』や外山卯三郎著『フォービズム研究』などを読みあさる文学青年で、ダダイスム、未来派、ロシア構成主義、シュルレアリスムなどの美術思潮について熱弁を振るった。

1年後輩だった妹尾正雄によれば、福山城に近い片山の家に行くと「2階とも、屋根裏ともつかぬところに、モディリアーニやスーチン、マティス風の彼の作品50号や30号が2、



4.《赤の中の裸》1950年頃



7.《お茶の水》1951年



9.《お茶の水風景》1951年頃



13.《河(芦田川)》1950年代



18.《鳥籠II》1950年代

3枚立てかけてあって大いに刺激を受けた<sup>(5)</sup>」と当時のことを述べている。この頃の片山は、単なる模倣にとどまらず、自らの表現を探し求めて、「前田寛治を前寛、前寛とって、その熱にあてられたか<sup>(6)</sup>」と思えば、「パスキンになったり、ゴッホになったり<sup>(7)</sup>」と目まぐるしく変わっていったとある。若き日の片山の熱心な制作姿勢を窺うことが出来る。また、画友の中山一郎は、片山について「彼の色彩的要素は既にその頃から一種の閃きを持っていた<sup>(8)</sup>」といい、「マティス、ドランと当時1円50銭ほどの画集を見つめながら、共に堪能するまで論じた<sup>(9)</sup>」と回想している。

## II 東京での活躍(1930-1945)

片山は、1931(昭和6)年、第1回独立展に出品した《風景》、《青年》が2点とも入選し、美術雑誌に批評が載り、絵に生涯をかけることを決心する。

現在、その作品については、確認することが出来ないが、中山によれば「ピカソの青の時代の影響が強いもの<sup>(10)</sup>」であったという。

1932(昭和7)年、片山は卒業を2ヶ月余りに控えて師範学校を突然退学して、弟の秀二とともに上京した。片山21歳の時である。

片山の師範学校の恩師、徳永豊や画友の佐々田憲一郎らが、退学を思いとどまるよう言葉を尽くして説得したが、聞き入れなかった。片山は、卒業後の3年間、教員奉職の義務にしばられ、「若い大事な時代をつぶしてしまう<sup>(11)</sup>」ことを恐れたのだった。また、それまで画家の道を反対していた母や祖母が相次いで亡くなり、片山はじめ弟の秀二、妹の春子、栄の4人が残されたことも、心機一転、上京の決心を固める一因となったと考えられる。

翌年、片山は法政大学仏文科に一時籍を置き、フランス語を学ぶ他、新宿の柏木にあった独立美術研究所に通って、田中佐一郎、中山巍らに師事した。

《くだものぞ》は、第5回独立展の出品作で、片山24歳の時の作品である。暗い背景には、テーブルに敷かれた白布に所狭しとリンゴや野菜などが、浮かび上がるかのように描かれている。スーチンの影響を受けた頃の作品で、果物などの形が荒々しい筆致でデフォルメされている。その幻想的で豊かな色彩は、彼が心酔した川口軌外の作品をも想起させ、その瑞々しい感性を感じさせる。

この時期の片山は、生活面で赤貧を極め、住居も柏木、豊島区長崎から池袋、目白と家賃滞納で転々とした。一方では、「池袋モンパルナス<sup>(12)</sup>」と呼ばれた、この地域に暮らした画家、音楽家、詩人などの芸術家たちと広く交友を持つことが出来た。1936(昭和11)年3月には、寺田政明、末永胤生らとシュルレアリスムなど前衛運動を掲げた若者たちの美術団体「エコール・ド・東京<sup>(13)</sup>」に創立会員として参加した。

当時の片山は、師範学校時代に買い込んでいた経済書や哲学書などの古書売り払う他、街頭で弟の秀二と共に似顔絵を描いて糊口を凌いだ。さらに、徳永豊らの援助を受けて福山で画会を開いてもらい、まとまった金が集まると東京へ戻るといって、全く先の見えない生活を繰り返していた。支援者の中には、片山へ送金の他に、彼が使用する油彩絵具を送り続けた篤志家もいた。片山が、困窮しながらも東京での生活が続いたのは、福山の支援者たちからの経済的支援があったからに他ならない。片山にとって福山の人々は、物心ともに大きな支えであった。

また、片山の弟や妹たちも兄の絵に対する情熱に感化され、生涯に渡って献身的に尽くした。1940(昭和15)年、片山が強度の神経衰弱により倉敷市に半年間、転地療養した際も精神的な支えとなった。片山は、大原美術館に通い詰めて名画に接することで快癒し、再び制作に専念することが出来た。

この頃の片山は、第13回独立展の出品作《張り物する女達》や《読書する女》など、ルノワールを想起させる、印象派風の写実的な女性像を描いている。

## III 独立賞の受賞から2度の渡欧(1945-1968)

1945(昭和20)年8月15日、前年に召集令状を受けて呉市に赴いていた片山は、終戦と同時に父の実家、芦品郡戸手村(現・福山市新市町)に復員した。

1947(昭和22)年春、戦災で焼失した福山城天守閣跡に急造バラックの美術館で福山産業復興博覧会が開催され、片山も洋画部委員として活躍した。

翌年の第16回独立展では、《尾道風景》、《浅橋》を出品して独立賞を受けた。この時、36歳だった片山にとっては、大きな自信につながったと考えられる。

1949(昭和24)年、再び上京を果たした片山は、新宿区下落合に居を構えた。この頃に描いたのが、《ニコライ堂》(No.2)である。現在はビルが建ち並び、この光景は無いが神田川を挟んだ御茶ノ水駅周辺から描いたものであった。片山は、大聖堂の本堂と鐘楼の上に輝く十字架の威容を落ち着いた色調で表現している。《お茶の水》(No.7)、《お茶の水風景》(No.9)は、同時期に描かれた作品で、いずれも街並を俯瞰した構図で描き出している。後者の作品裏面は、独立展の出品票が殆ど剥がされていて委細が全く確認できないものの、カンヴァスに直接記された作品名から第19回の独立展出品作と考えられる。1951(昭和26)年、片山は独立美術協会の会員に推薦された。

1950(昭和25)年に入ると、片山の画風は、印象派的な表現から《赤の中の裸》(No.4)をはじめ、《鳥籠Ⅰ》(No.17)など、フォーヴィスムを意識した作風に転じた。荒々しい筆致と大胆な色彩は、裸婦の背景に塗られた赤色や床の黄色い表現にもみられ、片山の激しい息づかいまで感じさせる。

1956(昭和31)年12月、福山市公会堂にて独立展巡回展の開催に尽力し、中山巍、田中佐一郎、鳥居敏文、緑川広太郎らを福山に招いて座談会も行った。

東京に移ってから、片山は毎年のように福山に帰郷した。冬季の数ヶ月間、観音寺や絵画指導をした支援者宅に寄宿して、《河(芦田川)》(No.13)をはじめ、鞆や尾道などの近郊へ出かけて風景画を描いた。市内では、百貨店で個展を開くなど地元でも広く知られるようになり支援者も増えていった。この頃、画材店を営んでいた渡邊貞之は、片山のために小林和作らに代わって東京と郷里の連絡、調整役を引き受け、店の画廊でも個展を開催するなど終生に渡って彼を支えた。

1956(昭和31)年頃、片山は西荻窪に一時期移り住み、天気が良ければ毎日、井の頭公園へ写生に出かけていた。当時、片山はフォーヴィスムの中でもマティスの画風に傾倒していた。《木ノアル風景(井ノ頭)》(No.20)は、その頃の作品である。本作では、公園の昼と夜の光景を同じ画面に描き、自然や季節が時とともに移ろうさまを重層的に表わしている。中山巍は、散歩の途中で片山に何度か出会った当時を追想して、「片山君の生涯を通じて一つのピークだったに違いない<sup>(14)</sup>」と、彼の充実ぶりを評した。

1959(昭和34)年には、妹・春子たちの奔走により「片山公一渡欧後援会」(第1次)が当時の広島大学学長、森戸辰男<sup>(15)</sup>をはじめ、井伏鱒二、田中卓志らによって結成された。

《犬吠》(No.21)は、当時、東京都内在住の篤志家が片山の渡欧の援助として、購入した作品であった。作品に見られる、透明感のある色彩とリズム感のある線描は、打ち寄せるさざ波の音が聞こえてくるような趣を湛えている。

1960(昭和35)年8月、片山はヨーロッパに渡り、パリを中心にイタリア、スペインを一年半にわたってスケッチ行脚した。スペインでは、野口彌太郎も旅に同行して、交友を深めた。

《ヨット》(No.26)は、パリに到着して間もなく描いたものと考えられる。紙にクレヨンで素早く描かれたスケッチは、リュクサンブール公園の日差しまで生々しく伝えている。画面の中央には、オレンジやピンクなど色鮮やかな帆をつけたミニチュアのヨットが荷台に乗せられ、背景の池には、マロニエの木々が軽やかな線で描かれている。デュフィを想起させるそれらの線は、リズム感があって画面から音楽が聞こえるような感覚をもたらしている。片山は、若い頃からクラシック音楽を愛し、制作中もバッハやヴィヴァルディなど室内楽のレコードを繰り返し聴いていた。

1962(昭和37)年1月に帰国した片山は、同年10月に福山で102点の滞欧作品展を開く他、第30回独立展に《公園》(No.22)をはじめ3点の作品を出品した。

滞欧中にパリの画廊でアンドレ・コタボを見た片山は、単純化したフォルムと、中間色で厚塗りされた圧倒的なマチエール(絵肌)に魅了され、影響を受けていた。本作は、そのコタボの画風を取り入れて、ペインティングナイフによって絵具を厚く盛り上げたものである。画面中央に描かれた園内の白い彫像や周囲の情景も絵具を塗り重ねて、実在感を感じさせる。

《猿を抱く女》(No.23)は、第33回独立展に出品した片山54歳の作品である<sup>(16)</sup>。この作品



20.《木ノアル風景(井ノ頭)》1956年頃



21.《犬吠》1959年頃



26.《ヨット》1960年頃



22.《公園》1962年



23.《猿を抱く女》1965年



24.《南仏の港》1968年



25.《リュクサンブール公園》1969年



片山公一(1910-1969)

片山公一(かたやま・こういち) 略歴  
1910年、福山市野上町に生まれる。1924年、肋膜炎を冒され療養生活を送る。この時期に絵画に興味を持ち始める。1928年、福山での展覧会「ぶらんだるじゃん」に入選。1931年、独立美術協会第1回展に2点出品し、2点とも入選、美術雑誌の批評が載る。このことが、本格的に画家をめざすきっかけとなる。翌年、東京へ。独立展で入選を重ねる。1948年、独立賞を受賞。1951年、独立美術協会会員となる。1960-62年、渡欧。パリを中心に、イタリア、スペインなどを訪れる。1966-68年、2回目の渡欧。帰国後、福山で滞欧作品による個展を開催。1969年、逝去。

もコタボの作品のように厚塗りである。画面には、滞欧前の勢いのある描線が影を潜めて、厚く塗り重ねた荒々しいマチエールが印象的である。モデルの女性は、郁子夫人である。脇に抱えている小動物は、娘・真知の誕生祝いに片山が都内の百貨店のペットショップで買収したタイワンザルであった。家族にとってかけがえのないペットであった。

1966(昭和41)年、片山55歳の時、再度ヨーロッパで学びたいという念願が叶い、2度目の渡欧を果たした。ルノワールがかつて住んでいたカーニユ・シュル・メールでも一時期滞在して制作に励んだ。

《南仏の港》(No.24)は、第36回独立展に出品した晩年の出品作である<sup>(17)</sup>。パステルカラーを思わせる、中間色の柔らかい色調でカンヌの港を描いている。晩年の片山は、ニースやカンヌなどの南フランスの景色を大変気に入る、野口彌太郎に「ニースが最高で、ここで始めて腰を抜かず程に太陽の明るさと風景の美しさに打たれてしまいました。そしてこれこそ自分のやりたいモチーフだと思った<sup>(18)</sup>」と手紙に書き送った。画面は、コタボと同様にリヨン派新具象を形成し画壇の注目を集めた、ジャン・フサロの影響がみられるものの、手前のボートや背景の建物などは、彼独自の手法により、単純化したフォルムと生き生きとしたマチエールで構成され、奥行きのある壮麗な絵画空間を作り出している。

1968(昭和43)年、1月に帰国した片山は、翌年の3月、福山市内の百貨店で滞欧作品展を開催した。《リュクサンブール公園》(No.25)は、その出品作で、片山が最晩年に描いた風景画の一つである。片山は、最初の滞欧で魅せられたコタボの作風から離れて、艶やかな色彩を軽やかな筆触で幾重にも交錯させて、歴史ある公園を華やかな景観に仕上げている。

片山の凱旋ともいべき、この作品展は、大きな反響を呼んで彼の健在ぶりをアピールした。しかし、同年の8月3日、片山は、2度の開腹手術から不帰の人となった。

生前、片山は、弟の秀二から冗談半分で「東京の画家になったら<sup>(19)</sup>」と、福山への帰郷をからかわれたところ、「福山って、おれにとってそんなもんじゃないよ<sup>(20)</sup>」と語り、珍しくむっとして黙ったという。片山は終生、福山を愛した画家であった。

#### IV 片山の画業

昭和初期の片山は、20代の印象派風の作風からスーチンを経て、マティスなどの影響から赤や黄色など強烈な色彩と激しい筆触で表現したフォーヴィスムの影響がみられた。渡欧後の1960年代からは、デュフィをはじめ、コタボやフサロなどの影響を受けて、知的な構成と重層的なマチエールの作風へと展開させた。

井伏鱒二は、片山の死後、アトリエのイーゼルに掛けられたままになっていた絶筆の作品を見ている。それは、カンヌの風景を描いたもので、まだサインもされてなかったようであるが、井伏によれば「顔る明るくて感動的な作品であった。初期の自己格闘のあとを見せていた作品とは大いに違う。脱皮に脱皮を重ねた結果<sup>(21)</sup>」と高く評し、その早すぎる死を惜しんだ。

南フランスの溢れる陽光に魅了された片山は、その清新な感性とも相まって、明度の高い色彩とリズム感のある躍動的な筆触で独自の画風を昇華させたのであった。

(学芸課次長 大前勝信)

#### 註

- (1) 本展開催準備にあたって、梅原真知氏(片山公一・長女)をはじめ、かつて片山に師事した武田和美氏(主体美術協会・会員)にインタビューを行い、教示をいただいた。
- (2) 渋谷清、谷藤史彦、大前勝信「福山の洋画(その2) -戦後復興期の作家たち/片山公一-」『福山市立女子短期大学研究教育公開センター年報 5号』福山市立女子短期大学研究教育公開センター、2008年、31-36頁にその作風の変遷が記されている。
- (3) 小林和作編『画家 片山公一』求龍堂美術図書出版 1971年、64頁、石井定巳「画家片山公一の思い出」の追悼文より。
- (4) 佐々田憲一郎「福山洋画史(抄)」『藏品による ふくやまの洋画』ふくやま美術館 1997年、52頁
- (5) - (7) 妹尾正雄「片山君と私」『画家 片山公一』前掲書、59頁
- (8) - (10) 中山一郎「画鬼片山公一」『画家 片山公一』前掲書、54頁
- (11) 佐々田憲一郎「亡き画友、片山の公さんを偲ぶ」44頁
- (12) 山下理恵「寺田政明の画業について」『生誕100年 寺田政明』北九州市立美術館、2012年、100-101頁
- (13) 渋谷清、谷藤史彦、大前勝信「福山の洋画(その2) -戦後復興期の作家たち/片山公一-」『福山市立女子短期大学研究教育公開センター年報 5号』前掲書、35頁
- (14) 中山巍「井頭公園の追想など」『画家 片山公一』前掲書、5頁
- (15) 2015年、森戸辰男の息女、榎山洋子氏より、森戸旧蔵の片山公一(バラ)をはじめ油彩画10点をふくやま美術館に寄贈された。
- (16) 『独立美術協会80年史』独立美術協会、2012年、33頁
- (17) 『追悼 片山公一展』ギャラリー上田 UEDA CULTURE PROJECTS、1988年、表紙
- (18) 野口彌太郎「片山君を想う」『画家 片山公一』前掲書、10頁
- (19)、(20) 片山秀二「片山公一素描」『画家 片山公一』前掲書、98頁
- (21) 井伏鱒二「片山君の手紙」『画家 片山公一』前掲書、17頁

## 第1室：片山公一 福山を愛した洋画家

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横 (cm)
1	片山公一	(1910-1969)	くだものなぞ	1935	油彩, カンヴァス	66.0 × 100.0
2	片山公一		ニコライ堂	1949頃	油彩, カンヴァス	80.5 × 61.5
3	片山公一		バラ	1950	油彩, カンヴァス	41.0 × 27.5
4	片山公一		赤の中の裸	1950頃	油彩, カンヴァス	65.2 × 53.0
5	片山公一		裸婦	1951頃	油彩, 板	45.5 × 37.9
6	片山公一		塩原温泉	1951	油彩, ボード	45.5 × 37.9
7	片山公一		お茶の水	1951	油彩, カンヴァス	60.6 × 72.8
8	片山公一		お茶の水風景	1951頃	油彩, カンヴァス	61.0 × 73.3
9	片山公一		お茶の水風景	1951頃	油彩, カンヴァス	60.6 × 72.7
10	片山公一		女の顔	1950年代	油彩, カンヴァス	21.5 × 27.5
11	片山公一		婦人像	1950年代	鉛筆, 紙	38.5 × 29.5
12	片山公一		髪を結ぶ女	1950年代	淡彩, 紙	27.3 × 24.0
13	片山公一		河(芦田川)	1950年代	油彩, カンヴァス	53.2 × 65.4
14	片山公一		花	1950年代	油彩, カンヴァス	33.5 × 24.1
15	片山公一		女性	1950年代	油彩, 板	22.2 × 15.2
16	片山公一		女性	1950年代	油彩, カンヴァス	33.2 × 24.3
17	片山公一		鳥籠 I	1950年代	油彩, カンヴァス	45.8 × 38.0
18	片山公一		鳥籠 II	1950年代	油彩, カンヴァス	45.4 × 38.1
19	片山公一		曲り角(銀ノ唄)	1950年代	油彩, カンヴァス	53.0 × 65.3
20	片山公一		木ノアル風景(井ノ頭)	1956頃	油彩, カンヴァス	65.6 × 80.3
21	片山公一		犬吠	1959頃	油彩, カンヴァス	32.1 × 41.0
22	片山公一		公園	1962	油彩, カンヴァス	60.6 × 72.7
23	片山公一		猿を抱く女	1965	油彩, カンヴァス	117.0 × 73.0
24	片山公一		南仏の港	1968	油彩, カンヴァス	91.0 × 116.0
25	片山公一		リュクサンブール公園	1969	油彩, カンヴァス	91.0 × 73.2
26	片山公一		ヨット	1960頃	クレヨン, 紙	35.5 × 27.5
27	小林和作	(1888-1974)	春	1941頃	油彩, カンヴァス	53.0 × 45.0
28	中山巍	(1893-1978)	少女	1951	油彩, カンヴァス	63.5 × 52.0
29	徳永豊	(1895-1976)	室戸海岸の冬	1972頃	油彩, カンヴァス	70.0 × 59.0
30	佐々田憲一郎	(1899-1995)	福山市公会堂	1949	油彩, カンヴァス	33.4 × 45.5
31	渡邊貞之	(1909-1994)	小瀬川ダム	1972頃	油彩, カンヴァス	60.0 × 71.0
32	中山一郎	(1912-1915)	人	1956	油彩, カンヴァス	60.0 × 50.5
33	ラウル・デュフィ	(1877-1953)	白鳥の池での休息	1950頃	油彩, カンヴァス	15.8 × 30.5
34	アンドレ・コタボ	(1922-2012)	丘 逆光	1966	油彩, カンヴァス	71.0 × 53.0

## 第2室：岸田劉生 / 特別展示 松本コレクションの茶道具

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)
35	岸田劉生	(1891-1929)	橋	1909	油彩, カンヴァス	33.6 × 45.7
36	岸田劉生		静物(赤き林檎二個とピンと茶碗と湯呑)	1917	油彩, カンヴァス	33.7 × 45.8
37	岸田劉生		晩春の草道	1918	油彩, カンヴァス	45.0 × 36.0
38	岸田劉生		新富座幕合之写生	1923	油彩, カンヴァス	31.9 × 41.0
39	岸田劉生		麗子十六歳之像	1929	油彩, カンヴァス	47.2 × 24.8
40	作者不詳		福山城旧伏見御殿杉戸絵	16-17世紀	板絵着色	172.5 × 99.0
41	安井曾太郎	(1888-1955)	手袋	1943-44	油彩, カンヴァス	89.3 × 72.8
42	梅原龍三郎	(1888-1986)	仙酔島の朝	1932頃	油彩, カンヴァス	65.5 × 80.5
43	今城国忠	(1916-2000)	潮風	1950	木彫	164.5 × 70.0 × 50.0
44	作者不詳		斗々屋茶碗 銘 深山木	朝鮮王朝時代	陶	6.3 × 12.7 × 12.7
45	作者不詳		青井戸茶碗 銘 岩波	朝鮮王朝時代	陶	6.0 × 13.8 × 14.0
46	作者不詳		伊羅保茶碗	朝鮮王朝時代	陶	7.0 × 13.2 × 13.2
47	作者不詳		伊羅保内刷毛目茶碗 銘 岩清水	朝鮮王朝時代	陶	7.4 × 16.2 × 16.2
48	作者不詳		熊川茶碗 銘 福依花	朝鮮李朝時代	陶	8.7 × 14.1 × 14.1
49	作者不詳		堅手茶碗 銘 桃花	朝鮮王朝時代	陶	7.1 × 14.8 × 15.2
50	本阿弥光悦	(1558-1637)	黒茶碗 銘 軒窓	江戸時代	陶	8.2 × 11.2 × 11.8

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)
51	本阿弥光悦		赤茶碗 銘 タテウス	江戸時代	陶	8.4×11.6×11.6
52	樂道入(樂家3代)	(1599-1656)	黒茶碗 銘 嘉祥	江戸時代	陶	8.0×11.0×11.8
53	樂道入(樂家3代)		赤樂茶碗 銘 紫翠	江戸時代	陶	7.8×13.5×13.5
54	樂一入(樂家4代)	(1640-1696)	黒樂茶碗 銘 螯	江戸時代	陶	8.2×9.3×9.5
55	樂左入(樂家6代)	(1683-1739)	黒樂福寿文字入茶碗	江戸時代	陶	7.4×10.4×10.4
56	樂長入(樂家7代)	(1714-1770)	黒樂金彩玉の絵茶碗	江戸時代	陶	8.6×9.3×9.3
57	樂了入(樂家9代)	(1756-1834)	黒樂茶碗 ノンコウ七種 稲妻うつし	江戸時代	陶	8.5×12.5×12.5
58	樂旦入(樂家10代)	(1795-1854)	赤樂茶碗 不二の絵	江戸時代	陶	8.7×12.0×12.0
59	樂慶入(樂家11代)	(1817-1902)	赤樂茶碗 ノンコウ七種 鶴うつし	明治時代	陶	8.3×12.2×12.2
60	清巖宗渭	(1588-1661)	風竹一行	江戸時代	紙本墨書	102.5×27.5
61	玉舟宗璠	(1600-1668)	諸悪莫作衆善奉行一行	江戸時代	紙本墨書	130.5×24.5
62	宙宝宗宇	(1760-1838)	萬歳緑毛亀	江戸時代	紙本墨書	96.5×28.6
63	近衛忠熙	(1808-1898)	鶴舞千年樹 亀遊萬歳池	江戸-明治時代	紙本墨書	111.2×34.5
64	樂宗入(樂家5代)	(1664-1716)	赤樂舟釣花入	江戸時代	陶	8.7×21.8×12.2
65	作者不詳		七官青磁管耳花入	明時代	陶	22.3×16.5×15.9
66	作者不詳		高取茶入 銘 宝珠	江戸時代	陶	5.6×5.7×5.7
67	作者不詳		薩摩焼茶入 銘 残雪	江戸時代	陶	10.0×5.5×5.5
68	樂一入(樂家4代)	(1640-1696)	茶入 銘 子猿	江戸時代	陶	7.0×5.5×5.5
69	辻与次郎	(1558-1641)	尻張釜	桃山-江戸時代	鉄	19.4×28.3×25.0
70	奥平了保	(不詳-1852)	刷毛目釜	江戸時代	鉄	16.0×23.8×23.8
71	作者不詳		丹波耳付水指	江戸時代	陶	27.8×20.0×20.0
72	樂長入(樂家7代)	(1714-1770)	鉛釉袋形水指	江戸時代	陶	14.2×19.8×19.8
73	作者不詳		備前手付水指	江戸時代	陶	22.4×17.5×14.6
74	吸江斎	(1818-1860)	茶杓 銘 末広	江戸時代	竹材	18.0×0.9
75	碌々斎	(1837-1910)	茶杓 銘 浦島	明治時代	竹材	18.2×1.1
76	惺斎宗左(表千家12代)	(1863-1937)	茶杓 銘 出世鯉	大正-昭和時代	竹材	18.3×1.1
77	古田織部	(1543-1615)	茶杓	桃山-江戸時代	竹材	18.0×1.0
78	如心斎	(1705-1751)	茶杓 銘 呼子	江戸時代	竹材	18.1×0.9
79	啐啄斎	(1744-1808)	茶杓 銘 粥杖	江戸時代	竹材	18.2×1.0

### 第3室：ヨーロッパの近代美術 / マルク・シャガール《青い花瓶》初公開記念

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)
80	マルク・シャガール	(1887-1985)	青い花瓶	1978	油彩, テンペラ, カンヴァス	60.0×73.0
81	マルク・シャガール		青い村	1981	油彩, カンヴァス	24.0×35.0
82	パブロ・ピカソ	(1881-1973)	りんごとグラス、タバコの包み	1924	油彩, カンヴァス	16.0×22.0
83	パブロ・ピカソ		近衛騎兵 (17, 18世紀の近衛騎兵)	1968	油彩, パネル	81.0×60.0
84	ギュスターヴ・クールベ	(1819-1877)	波	1869	油彩, カンヴァス	34.5×51.8
85	ジュゼッペ・パリッツィ	(1812-1888)	羊飼いと羊の群れの風景	1870頃	油彩, カンヴァス	49.0×72.0
86	ジョヴァンニ・セガンティーニ	(1858-1899)	婦人像	1883-84	油彩, カンヴァス	120.0×87.0
87	メダルド・ロッシ	(1858-1928)	門番の女性	1883	ワックス, 石膏	37.0×30.0×17.0
88	アルベール・マルケ	(1875-1947)	停泊船、曇り空	1922	油彩, カンヴァス	38.4×46.0
89	モーリス・ユトリロ	(1883-1955)	酪農場	1916	油彩, 板	51.0×65.0
90	アンドレ・ドラン	(1880-1954)	婦人像	1925	油彩, カンヴァス	61.0×73.8
91	モーリス・ド・ヴラマンク	(1876-1958)	雪の風景		油彩, カンヴァス	45.0×55.0
92	ウンベルト・ボッチオーニ	(1882-1916)	カフェの男の習作	1914	油彩, カンヴァス	58.0×46.0
93	ジャコモ・パツラ	(1871-1958)	輪を持つ女の子	1915	油彩, カンヴァス	51.0×60.5
94	ジョルジョ・デ・キリコ	(1888-1978)	広場での二人の哲学者の遭遇	1972	油彩, カンヴァス	80.0×60.0

### 和室：松本コレクションの茶道具

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)
95	作者不詳		天明 松巖地紋面取肩衝釜	室町時代	鉄	19.1×25.2×23.5
96	啐啄斎	(1744-1808)	無輪二重切竹花入 銘 佐保姫	江戸時代	竹	30.9×11.5×11.0
97	啐啄斎		赤黒-双茶碗 黒茶碗 銘 緑毛 赤茶碗 銘 曉雲	江戸時代	陶	8.3×12.0×12.0